

『月に吠える』形成過程の考察Ⅱ：罪人から病者へ

國生，雅子
九州大学大学院（修士課程）

<https://doi.org/10.15017/12036>

出版情報：語文研究. 54, pp.21-30, 1982-12-20. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『月に吠える』形成過程の考察 II

——罪人から病者へ——

國 生 雅 子

大正三年十一月、「詩歌」誌上に「磨かれたる金属の手」と題された作品が発表されている。

手はえれき、

手はぶらちな、

手はらうまちずむのいたみ、

手は樹心に光り、

魚に光り、

墓石に光り、

手はあきらかに光る、

ゆくところ、

すでに肢体をはなれ、

炎炎灼熱し狂気し、

指ひらき啓示さるるところの、

手は宙宇にありて光る、

光る金属の我れの手くび、

すどく磨かれ、

われの瞳をめしひ、

われの肉をやぶり、

われの骨をきずつくにより、

恐るべし恐るべし、

手は白き疾患のらちうむ、

ゆびいたみ烈しくなり、

われひそかに針をのむ。

大正三年期の拾遺詩篇中に見られる血の流れ、いたみ、肉のやぶれといった一連のイメージについては先に論じたことがある。^{注⑥}重複をさけて、ここでは一つ一つ用例を挙げることはひかえるが、「洋銀の皿」(「創作」大3・5)、「供養」(「詩歌」大3・7)、「感傷の塔」(「詩歌」大3・10)、「光る風景」(同前)、といった作品群にうたわれた何ものかを求めて伸べられる手、及びそのヴァリエーションと、流れる血、肉のやぶれ、いたみは、自己を突き抜け外部へ延びようとするベクトルと、それに対する自己の内よりの禁圧といった内的葛藤を暗示するものと思われる。その肉のやぶれ、いたみがこの「磨かれたる金属の手」において、「疾患」という言葉に換置されていることに私達は気付くであろう。^{注⑦}

「浄罪詩篇」における「罪」と関るものとして、特殊な神経症的症状として、あるいは詩的ヴィジョンを生み出した源泉として、「疾患」は繰り返し論じられて来た。しかし私達は「疾患」の明確な定義を未だ所有していない。「浄罪詩篇」に至っては、それを構成する詩篇さえも曖昧なまま論じられることが多いのに気付く。「疾患」とは何であり、「浄罪」における「罪」とは何か、そして両者はいかに関るのかを問う前に、まず「疾患」の実態と「浄罪詩篇」の明確な規定を求めるべきだろう。本稿では、今まで「疾患」と「浄罪詩篇」を論じる際に見落されていた事項を確認し、新しい「月に吠える」論の為の礎を築いておきたいと考える。渋谷国忠氏が雑誌発表の際「浄罪詩篇」と付記された作品と、付記されなかった作品とを「区別しなければならぬ本質的な理由は、われわれにとって殆んどなさそうである。」と断じて後、「浄罪詩篇」とは「竹とその哀傷」諸篇及びその周辺の作品群をさすものと了解されてきた。しかし「浄罪詩篇」と付記された作品を検討し、その本質を明らかにした後でなければ、区別すべき「本質的な理由」があるののかないのかを決定することはできないはずだと思われる。田村圭司氏は「浄罪詩篇」をあくまでもその付記の見られる作品に限定して一連の論を展開しているが、本稿でもその基本的な立場を守りたいと考える。最も基礎的な作業は資料中に現われた疾患ないし病気の語の整理を通した大正三年から四年にかけての朔太郎の生活の洗い出しである。その中で「浄罪詩篇」成立の生活上の契機についても触れることになる。

例の病気が今夜は特に烈しい。Suicideについて考へた。

(中略)

今日からは「TRINKEN」をやめようと思ふ。でないと魔人になるかも知れない。Letzte Nachtの記憶がしばしば繰り返されることは死よりも苦痛である。恐るべきは私の頭である。いっそ早く気違ひになればいいと思ふ。(後略)

大正三年二月六日の日記である。朔太郎が「病氣」と呼んだものは身体生理上の疾病ではなく、アルコールに誘因を持つ、耐えがたいほどに繰り返される前夜の記憶と、その記憶によって引き起こされた混乱と苦痛であるらしい。そしてこの事情は大正四年四月二十六日付白秋宛書簡における告白でも変化してはいない。

きのふ、も少しで絶息するところでした、実に苦しい日でした、おと、ひ大酒をしたのでれの病気が(神経系統の)出たのです、私のこの病氣は「赤い花」の作家ガルシンが脳まされたものと全く同じ奴です、肉行のあとで笑ったうす白い女の唇や酔中に発した自分の醜悪な行為や言語などが言ひがたい恐しい記憶ではっきりと見えたり聴こえたりするのです。その度に神経系が裂けるやうな恐ろしい苦痛をする。(後略)

朔太郎が病氣と呼んだ神経の錯乱、幻聴、幻視がアルコールに深い関連を持つことは大正三年十一月一日付白秋宛書簡「お互に酒をやめることにしませう、私も此の頃錯覚と幻惑の烈しい奴にせめられて夜もろくに寝られぬ」といった条にもうかがえる。しかし詩語としての「疾患」が神経系統の「れの病氣」とアルコールで結ばれるわけではない。「ああ、われ都に疾患し、／いためるまでもきみ恋ひ恋ひて、／ひとりしきたり紙製の菊を摘まむと、／銀座四丁目BAZARの窓をすぎがてに、／けふの哀しき酒乱を超え、／すさまじき接吻をおくりなむ、」(「蝕金光路」未発表)この作品のよ

うにアルコールと疾患との関連を暗示させるものも他に幾つか見うけられるが、多くの場合直接的な関りは薄い。「蝕金光路」は末尾に「——東京遊行詩篇、四——」と付記されており、大正三年十月上京の際の作であることが判明している。この作品あたりが「疾患」の最も早い用例の一つになるだろうか。実生活においても東京から帰郷後、白秋宛の書簡が飛躍的に増加し、しかも醉中に書かれたものが多くを占めている。おそらく神経系統の「れいの病氣」が頻繁に朔太郎を苦しめていただろうことは容易に推測がつく。そしてやはり十月「疾患光路」(「水蘊」大4・1末尾——十月作——と付記)が書かれ、同じ頃「磨かれたる金属の手」が作られたのであろう。

つまり、少なくとも大正三年二月から翌四年四月にかけて朔太郎は神経症を病んでいた。と言うより宿酔の朝前夜の記憶が幻覚を伴いつつよみがえり、その記憶によって苦しめられることを彼は病氣として自覚していた。朔太郎の「れいの病氣」とやらが病理学上どのように定義付けられるのかは今問題ではない。ともかくもこの病氣が激化したと思われる大正三年十月頃、朔太郎は詩語としての「疾患」に到達している。彼はアルコールにのめり込む。十一月七日には酔ってエレナの夫に自分の本名をあかすという醜態を演じ、この事件によって朔太郎はエレナとの恋の破局を自覚することになる。飲酒による神経と身体の衰弱に苦しめられる朔太郎は、そうして次に身体生理上の本物の疾病を病まなければならなかった。

大正三年十二月十六日付従兄秋原栄次宛書簡に綴られた告白によれば、朔太郎はある夜「草木姦淫罪」を犯したという。「草木姦淫」とは「夜になって草木の精と姦淫することを明らかに知覚する」こ

とであり、「造かに多くの人によりて秘密に行なはれた犯罪に相違ないと」彼はみなしている。「その翠夜から」「靈肉に妙な病的な徴ざしが現はれ」るようになるが、そのうちに「何時か忘れた遠い過去の夢のような気がして来」る。「ところが事実発生以後一週間程して」彼は友人と酒を飲み「一軒の妙な飲酒店へ飛びこみ」その若い娘と「可成長い接吻」をかわす。その翌朝、かつて罹ったことのある淋病が再発していることを知り、性交することなしに淋病に罹患したのは「草木姦淫の、天罰を目のあたりに受けたに相違ない」ということを悟る。「私は毎日一時間づ、神(の)に向って懺悔しました、涙を流して懺悔しました、悪いことと気がつかずに全く無意識に行なった犯罪だから許して下さいと乞ひました、」

この「草木姦淫罪」の懺悔の中で「浄罪詩篇」は成立したのである。初出に「浄罪詩篇」と付記された「卵」(「地上巡礼」大4・1)の、「罪びと」と題された草稿が大正三年十一月下旬としか判明していない白秋宛書簡に記されている。前後の書簡から判断して、「草木姦淫」に続く一連の事件は大正三年十一月の出来事、「浄罪詩篇」の制作開始は同月下旬と考えられる。その後朔太郎はインフルエンザを併発して床に就くようになる。身体の不調は十二月になっても続き、漸く十二月二十九日、「もう大丈夫に元気で新年を迎えることが出来ませう」と栄次に書き送り、病が癒えたことを知らせるわけである。実際彼は比較的健康な状態で正月を迎えたらしい。こうして「詩歌」大正四年二月号には「竹」と題された三篇の詩が発表される。うち一つ(仮に「竹I」)には「浄罪詩篇」、他の二篇には「大正四年元旦」と付記されているが、後者のうち「月に吠える」に収録された作品(仮に「竹II」)は「新光あらは

れ、／＼新光ひろがり。」とうたい出されている。この「新光」は単に新春の光としてだけでなく、疾病から立ち直り新しく出発しようとする自己を祝福するものとして捉えられているのだらう。

しかし朔太郎の健康も長くは続かない。大正四年一月九日白秋が突然前橋を訪れ、連日の歓迎の酒席がたたったのか、白秋が帰京した同月十五日三十九度の高熱を發し朔太郎は再びインフルエンザに倒れる。この病氣も随分と長引き、床上げは二月一日、「南の海へ行きます」（「侏儒」大4・2末尾——二月一日——と付記）を書き、旅行の予定をほのめかしている。計画は実行に移され、同月中旬から下旬にかけてのある日、朔太郎は大島方面へ旅立つ。長い病床生活から解放され、春の氣配に彼は浮き立っている。もっとも大島は期待したほど朔太郎を夢中にさせてはくれなかった。「大島に二晩とは落ちつけないで東京へかへり」自らが「犯罪や病氣や音楽や演劇や酒場や人間や煙突を歌ふべき詩人」（大正四年三月十七日付栄次宛書簡）であることを自覚して終る。朔太郎は自己の詩のテーマの一つが「病氣」であることをこの時点ではっきりと見定めているのだ。そして帰郷後「なやましき春夜の感覺とその疾患」というエビグラムを持つ「月に吠える」「くさった蛤」の章に収められた作品群が制作されるわけである。「月に吠える」集中彼が最も自信を持っていたのが「くさった蛤」詩篇であることは大正五年十一月十六日付白秋宛書簡及び大正六年五月四日付多田不二宛書簡によつて証明されている。

長々と資料を並び立てたのは何も朔太郎の病症カルテを制作するためではない。神経系統の「れいの病氣」と、淋病あるいはインフルエンザという身体生理上の疾病、そして詩語としての「疾患」、

朔太郎はこの三種類の疾患を抱え込んでいた。それらを区別するたためである。本稿において問題とするのは詩語としての「疾患」であり、従つて三種の疾患が混用されているノートは参考程度の資料にとどめることにした。ともかくも大正三年から四年にかけて彼に神経症の自覚があったこと、及びその期間中大正三年十一月下旬から十二月下旬にかけてと、翌四年一月中旬から下旬、身体生理上の疾病に苦しんでいたこと、この二点は確認しておかねばならない。

さて、「疾患光路」は次のような作品である。

我れのゆく路、

菊を擡げてあゆむ路、

いつしん供養、

にくしんに血をしたたらすの路、

肉さかな、きやべつの路、

邪淫の路、

電車軌道のみちもせに、

犬、番生をして純銀たらしむる、

疾患せんちめんたる夕ぐれの路、

ああ、素っばだかの聖者の路。

「磨かれたる金属の手」においては「手」が疾患したものととして捉えられていたが、筑摩書房版全集によれば「疾患光路」草稿余白に以下のように記され、全行抹消されているということである。

△いたい、いたい

みろ、やせぎすの狼だ、

△涙△いたむびがさを日輪をさす

いたい いたい

いたむ

いたむ、いたむ、V

このメモが詩的イメージの走り書きに過ぎないのか、それとも実際に感じていた苦痛の叫びなのかそれは判別できないが、ともかくも手が最初に疾患したことは間違いない。しかし「疾患光路」という作品は「いたい」という実感からはほど遠い作品である。つまり朔太郎の疾患が生理的レベルの問題として読者に響いて来ないのだ。「磨かれたる金属の手」でも繰り返したられる「いたむ」を朔太郎の「いたむ」と感じ取ることとは不可能に近い。この事情は一連の作品における血のイメージが、あるいは銀の血（いのれば銀の血となり、/肉やぶれ谷間をはしる「偏狂」）であり、あるいは青い血（肢体に青き血ながれ「情欲」 ゆびとゆびとのあひだから、/まっさを血がながれて居る「殺人事件」）であるということにも通じている。要するにこれらの血は生身の人間の身体に流れる血をイメージさせるものではなく、作者の詩的空想世界を流れる無機質の血なのだ。「いたむ」「疾患」にしても、その言葉が紡ぎ出されなければならぬ内的必然性を作者が切実に感じ取っていたとしても、読者は言葉の表面に置き去りにされてしまいそれ以上内に踏み込むことはできない。「磨かれたる金属の手」「疾患光路」といった作品は、一個の完結した詩として成功作とは言いがたい。朔太郎が生理的レベルにまで降り立って疾患をうたうためには、「浄罪詩篇」を経なければならなかったのだ。

「浄罪詩篇」と付記された作品群が淋病及びインフルエンザという身体生理上の疾病の只中で書き綴られたことは先に述べた通りであるが、当時に詩語としての「疾患」を獲得していたはずの朔太

郎が「浄罪詩篇」においては疾患をうたうことがない。これは詩語としての「疾患」が身体生理上の疾病とまったく無関係であることを意味するであろう。そして、最初に血を流したのが手であり、最初に疾患したのも同じく手であったように、浄められねばならぬ罪を最初に背負ったのもやはり手であった。

その菊は醋え、

その菊は傷みしたゝる、

あはれあれ霜月はじめ、

わがぶらちなの手はしなへ、

するどく指をとがらして、

菊を摘まむとねがふより、

その菊をば摘むことなかれとて、

かゞやく天の一方に、

菊は醋え、^{注⑥}

なやめる菊は傷いたみたる。

「菊」 「詩歌」大4・1

最も発表の早い「浄罪詩篇」の中の一作である。「霜月はじめ」とあることから、制作時期があるいは他の「浄罪詩篇」に少々先行するのではないかと疑問も湧くが、詩中にある季節を表わす言葉が正しい制作年月日を示しているとは限らないので、一応大正三年十一月下旬以降制作の「浄罪詩篇」中の一篇ということにしておく。それにしてもこの作品は拾遺詩篇群と「浄罪詩篇」との接点に立ったものとも言えるべきだ。菊を摘もうとする手は、「洋銀の皿」における草むらを探る手指や、「感傷の塔」における青空にそびえ立つ塔と同根のイメージであろう。手は天上の菊を摘むべく外部へと

伸べられる。しかし同時に「その菊をば摘むことなかれ」という禁止命令が下るのである。その時菊は「醋え」、「傷み」、「かゞやく天の一方に」衰えはてた姿をさらす。と同時にその菊を求めた手も「しなへ」る。以後書き綴られる「浄罪詩篇」では上方に位置を占める何ものかのイメージが繰り返したわれる。

いみじき笛は天にあり。

けふの霜夜の空に冴え冴え、

松の梢を光らして、

哀しむものゝ一念に、

懺悔の姿をあらはしぬ。

「笛」「地上巡礼」大4・1

いと高き梢にありて、

ちひさなる卵ら光り、

あふげば小鳥の巢は光り

いまはや罪びとの祈るときなる、

「卵」「地上巡礼」大4・1

あきらかなるもの現れぬ、

つもとがのしるし天にあらはれ、

「貌」「地上巡礼」大4・3 詩集収録題名「冬」

ま冬を光る松が枝に、

懺悔のひとの姿あり。

「姿」「地上巡礼」大4・3 「蝶を夢む」「懺悔」

これらの方向性を持ったイメージがいずれも拾遺詩篇中の手や塔のヴァリエーションであることは間違いないだろう。そしておそらく「浄罪詩篇」の持つ構図は次の作品に最も端的に示されている。

^{とよほ}遠夜に光る松の葉に、

懺悔の涙したゝりて、

遠夜の空にしもしろき、

天上の松に首をかけ。

天上の松を恋ふるより、

祈れるさまにつるされぬ。

「天上縊死」「詩歌」大4・1

「ぶらちなの手」が求めた「菊」がこの場合は「天上の松」としてうたわれており、「天上の松を恋ふ」た時、「その松をば恋ふことなかれ」とでも言うべき禁止命令が働く。しかし禁忌は犯される。そこで松を恋した人物は「天上の松」に「祈れるさまにつるされ」たわけである。この縊死の死体をはじめ、菊も卵も、禁忌、もしくは禁忌におののく我の視覚化、形象化とみなし得るのだが、「疾患」に関連したものとして捉えられたのは「菊」の場合のみで、後は罪ない懺悔の祈りの中でイメージが結実している。「浄罪詩篇」以前の拾遺詩篇において、外部へ延びるベクトルとそれに対する自己の内よりの禁圧との確執は血といたみのイメージを呼び、やがてそれは「疾患」という言葉に代置された。しかし「浄罪詩篇」では外部に延びるベクトルが明らかな「罪」として糾弾され罪を受けるのである。従って作品世界では血といたみが惹起した混乱が回避され、スタティックな均衡が保たれる。外部へ突き進もうとする衝動とそれに対する禁圧という対立関係は継承されてはいるが、自己の内部からの禁圧ではなく、外的な、絶対的な価値(神?)による禁圧なのである。

「浄罪詩篇」における「罪」とは何であるのかという議論は何度

も繰り返されている。栄次宛書簡が発表され「草木姦淫」が明らか
にされた後、これについての解釈も試みられている。人妻であった
エレナとの恋愛とその破局を「浄罪詩篇」成立の契機とみなす説は
以前からあり、「草木姦淫」が一つの性的禁忌を意味し、人妻もま
た性的に触れてはならぬ存在であることから、一応の説得力を持
つものとは思われる。確かに「併し今の私は一般から言へば幸福な
人間です、格別不如意を感じません、時々烈しい性欲の発作におそ
はれるとき女が欲しいと思ふだけです。」(大正三年十一月十一日付
栄次宛書簡)と告白する朔太郎にとって性は最も切実な問題であっ
た。何もエレナとの関係に限ったことではなく、当時多少なりとも
性的な色彩を帯びて朔太郎を取りまいていたのは、エレナの他、美
しい妹達、彼を溺愛した母、そして犀星、白秋といった同性である。
いずれもノーマルな現実的恋愛関係を結び得ない存在であることに
注意したい。「浄罪詩篇」における「罪」を性に関するものとのみ
限定しては考えたくない。一人の人間の生は性をも含めたよりト
タルなものとして捉えられるべきだろう。しかし朔太郎にとって性
だけがあらゆる意味で日々解決を迫られていた唯一の問題であり、
彼の抱える状況はここに突出したと考えられる。

菅谷規矩雄氏が論じたように、^注大正三年期の拾遺詩篇には入淫欲
|| 聖Vの論理の獲得を目論んだものが確かに見られる。朔太郎を論
じる際、性という要素はもう少し強調されねばならないと考えてお
り、このテーマについては別の機会に考察したいが、エロティシズム
の領域で朔太郎から発せられたベクトルが外部世界に延び行くため
には、恋愛の場が閉ざされているという状況を打開するための何か
が必要であろう。「草木姦淫罪」の露見はその何かの挫折を意味し、

ベクトルの究極に懺悔体を形作る自己を吊り下げることによって、
つまり自らを「罪人」とすることによって、彼はこの危機を乗り込
えようとしたのだ。だがきわめて特殊な肉体的・精神的条件を基底
においた懺悔は、肉体的健康の恢復と共にいずれ別の何かにすり変
わらざるを得ない。

「竹I」では「いまはや懺悔を終れる肩の上より、／けぶれる竹
の根はひろがり、」と、「浄罪詩篇」において初めて地下的なもの
のイメージがうたわれ、「竹II」で「地下には竹の根が生え、／根
がしだいにほそらみ、／根の先より纖毛が生え、／かすかにけふる
纖毛が生え、／かすかにふるへ。」とそのイメージの発展を見る。
この「竹II」において、上昇的イメージと下降的イメージを対立す
るものとして捉える見方は妥当性を欠き、むしろ上昇即下降とし
て解すべきであるということには既に論じたが、^注その基本的構図は「浄
罪詩篇」においても保たれている。上方に結実したイメージが懺悔
する罪人であるならば、下方に結ばれたそれも又懺悔の像なのだ。

竹の節はほそくなりゆき、

竹の根はほそくなりゆき、

竹の毛先は地下にのびゆき、

錐のごとくになりゆき、

絹糸のごとくにかすれゆき、

けぶりのごとくに消えさりゆき。

その髪もみだれみだれし、

ぐらき牢屋ひとやに罪びとは、

懺悔ざんげの巣をぞかけせめし。

「巢」「地上巡礼」大4・3

「ノート二」に記された草稿の末尾に「浄罪詩篇」と付記されているが、雑誌発表の際その付記が削られ、後に「蝶を夢む」に収録されたこの「巢」は「浄罪詩篇」とそれ以後の作品群との接点に立つものと見ることができよう。「巢」と同じく大正四年三月に発表された二作には、竹の根のイメージはうたわれていても、それはもう罪人ないし懺悔と結びつきはしない。

病気はげしくなり

いよいよ哀しくなり

三日月空にくもり

病人の患部に竹が生え

肩にも生え

手にも生え

腰からしたにもそれが生え

ゆびのさきから根がけぶり

根には繊毛がもえいで

血管の巢は身体いちめんなり

ああ果がしめやかにかすみかけ

しぜんに哀しみふかくなりて憔悴れさせ

絹糸のごとく毛が光り

ますます鋭どくして耐へられず

つひにすっぱだかとなってしまひ

竹の根にすがりつき　すがりつき

かなしみ心頭にさげび

いよいよいよいよ竹の根の先を掘り。

「竹の根の先を掘るひと」「卓上噴水」大4・3

大正四年一月三十日付白秋宛書簡に「第一……：僕のくすぶった面です。あれは竹の根の地面の……：れた病顔だ。」とある。竹の根のイメージは大正四年一月下旬どうしようもなく朔太郎にとりついていたらしい。白秋帰京後のインフルエンザが漸く癒えようとする時期である。やがてこの書簡が暗示するように、ふるえていた竹の根は自らの病気の顔として像を定着させる。

地面の底に顔があらはれ、

白い病人の顔があらはれ。

地面の底のくらやみで、

うらうら草の茎が萌えそめ。

鼠の巢が萌えそめ、

巢にこんがらかつて居る、

かずしれぬ髪の毛がふるへ出し、

冬至のころの、

さびしい病気の地面から、

ほそい青竹の根が生えそめ、

生えそめ、

それがじつにあはれふかく見え、

けぶれるごとくに見え、

じつにじつにあはれふかく見え、

けぶれるごとくに見え、

じつにじつにあはれふかけに見え。

(下略)

「白い朔太郎の病氣の顔」「地上巡礼」大4・3

この作品が「地面の底の病氣の顔」と改題され「月に吠える」巻頭に収められたと言うことは、朔太郎最高の自信作は久保忠夫氏によって「月に吠える」における「大金字塔」^①と評せられた「竹」でも、「天上糞死」でもなく、「白い朔太郎の病氣の顔」であったということを意味すると思われる。自らを突き破り外部へ延びようとするベクトルはその究極に罪を悔いる罪人ではなく、病者としての自己を探りあてて一応の完結を見る。そうして次の「くさった蛤」詩篇において、病者と疾患のイメージは本格的な開花をとげるのだ。

従って「浄罪詩篇」と付記された「天上糞死」等と付記されなかった「地面の底の病氣の顔」を同じ「浄罪詩篇」として一つにくくることがいささか無理な話であると言わねばならない。「浄罪詩篇」と付記された作品に共通の性格は懺悔ないし罪という形でイメージの結実を見ることにある。しかも「疾患光路」等拾遺詩篇——「浄罪詩篇」——「くさった蛤」詩篇という流れの中に置くならば、「罪人」という自己規定のあり方は過渡的・一時的なものでしかないことが明らかに。「浄罪詩篇」は朔太郎の全作品世界において、きわめて特殊な作品群ではないのだ。それでは何故しばしば「月に吠える」の中心課題として論じられて来たのだろうか。恐らくは「浄罪」という語の宗教性と、常に「疾患」とのからみによつて捉えられて来たという経緯に拠るのであろう。しかし後者に関して言うならば、「疾患」と「浄罪」が関連的に論じられる場合援用されるノートには、先に触れたように三種の疾患が混然と用いられているのだ。例えば渋谷氏や佐藤泰正氏は「ノート二」に記された「浄罪詩篇 奥付」の副題を持つ「偉大なる懷疑」に注目し、「浄罪」

と「疾患」の関りを論じようとしている。しかし「かかる日の懺悔をさへ／われが疾患より出づるものとしあらば」とうたわれた「疾患」が本稿でいう身体生理上の疾病を意味することはほぼ明らかであろう。渋谷氏によって「浄罪詩篇ノート」と名付けられたノートが、大岡信氏に、作品よりも「詩的興奮をかきたてる雰囲気を持つている」^②と言わしめる不思議な魅力を帯びていることは確かだが、ノートは所詮走り書きのメモに過ぎない。検討しなければならぬのはまず作品であるという基本的な姿勢を確認するとともに、ノートの読み方を考え直す時期に来ていることを自覚せねばならないだろう。

また、「地面の底の病氣の顔」を「浄罪詩篇」中の一篇とみなす佐藤氏は竹の根のイメージから「地面の底の病氣の顔」への展開をpushした上で、「ここに明らかかなことは、△竹√のイメージが地上と地下とに二分され、倫理的、上昇的な地上のイメージと、より感覚的、病患的な下降的な地下のイメージとが鋭く対比されることである。」と論じている。竹の根のイメージの展開については本稿でも確認した通りであるが、先に述べたように「浄罪詩篇」において上昇のイメージと下降のイメージは対比されているわけではない。上昇方向のイメージも下降方向のイメージも共に究極に懺悔と罪人の像を形作る一貫した垂直の軸の中で捉えられるべきであり、「地面の底の病氣の顔」はその構図の枠外にある作品なのだ。イメージを上下に分断し上昇方向のイメージを宗教性その他に結びつける読み方は、上下分断自体が「浄罪詩篇」全体の構造外にあることから、これもまた再検討が必要とされるのである。もちろん上昇方向のイメージと下降方向のイメージがまったく同質であると断言する

つもりはない。大正四年、朔太郎が下降方向のイメージに固執したのにはそれなりの理由があるのだろう。ここで思い出されるのは「竹」に「いまはや懺悔を終れる肩の上より、／けぶれる竹の根はひろがり」とあるように、竹の根が地下に伸び行くものであると同時に、ひろがりの中で捉えられていたことだ。このひろがるもののイメージは「くさった蛤」詩篇の生物の上を流れる水と何らかの関りを持つのだろう。私達はもう一度「愛憐詩篇」と拾遺詩篇に立ち返り、それらをひろがりという水平の軸によって捉え直す試みに出発せねばならないと思われる。そのような手続きを経た後に、詩語としての「疾患」の輪郭が明確に浮かび上り、神経系統の「れの病氣」が何であり、拾遺詩篇に見られる外部へ延び行くベクトルとそれに対する内よりの禁圧というアンビヴァレンツにいかに関連するかが明らかになるであろう。

注

- ① 拙稿「月に吠える」形成過程の考察——血を流す手——（『近代文学論集』8 昭57・11）参照。
- ② やぶれ、いたみ、イメージと「疾患」との関連については関口典子氏の指摘がある。（『「疾患」から「浄罪」へ——萩原朔太郎論——』（『学習院大学国語国文学会誌』昭53・1）
- ③ 「浄罪詩篇」論（『詩世紀』昭35・11～37・3）後「萩原朔太郎論」（思潮社 昭46・4）収録。
- ④ 「萩原朔太郎の詩的達成——浄罪詩篇を軸にして——」（『帯広大谷短期大学紀要』昭55・3）参照。
- ⑤ 拙稿「詩の青春」——朔太郎と犀星の交流 萩原朔太郎年譜考（『文献探究』7 昭55・12）参照。

- ⑥ 「那」の制作年月日は大正三年十一月二十七日と考えられる。（『日本近代文学大系 37 萩原朔太郎集』（角川書店 昭46・5） 久保忠夫氏補注六一参照。
- ⑦ 白秋の帰京は筑摩書房版全集年譜にある如く大正四年一月十五日（「休庵」大正四年二月号「消息」同一月十八日付栄次宛書簡）。しかし書簡が収められた全集十三巻では書簡番号七九白秋宛書簡を一月十四日付と推定している。発稿の経過を記したこの書簡は帰京の翌日書かれているので一月十六日付と改められるべきだろう。
- ⑧ 詩集収録時に「すえたる菊」と改題。この行は「菊は病み、」と訂正される。
- ⑨ 「萩原朔太郎1914」（大和書房 昭54・5）参照。
- ⑩ 注①に同じ。
- ⑪ 書簡番号八〇白秋宛書簡（多分大正四年一月十七日付ということになる。）と共に「嵐」の原稿は送られている。白秋主宰「堀上巡礼」は大正四年二月号を休刊、三月に合併号が出た後終刊となる。後に論じる「白い朔太郎の病氣の顔」は「嵐」と同時発表であるが、制作は幾分遅れたものと思える。
- ⑫ 「月に吠える」の詩竹（『東北学院大学論集——般教育——』昭35・9）
- ⑬ 「日本近代詩とキリスト教」（新教出版社昭43・11）
- ⑭ 「近代日本詩人選10 萩原朔太郎」（筑摩書房昭56・9）

朔太郎の作品、資料の引用は筑摩書房版全集に典拠し、栄次宛書簡は萩原隆一若き日の萩原朔太郎（筑摩書房 昭54・6）に拠る。但し正字体を略字体に改めた。詩作品は総て初出形であるが、誤字等は訂正した。